プロジェクト研究７　保育環境とその効果に関する研究

乳児保育等がその後の発達に及ぼす影響 II

調査研究企画部　網野武博
児童家庭福祉研究部　望月武子
母子保健研究部　加藤忠明
戸越愛育園　池田範子
嘱託研究員　丸尾あき子
金子　保（淑徳大学）
野田幸江（立正大学短期大学部）
塚原　富（聖マリア保育園）
関口　宏（昭和第二幼稚園）
栃尾　勲（厚生省児童家庭局）

要約：
０歳児保育を担う保育所や保育の当事者自身が、０歳児保育に関してどのような意識、意見、見解を持っているかについて、全国の保育所の保育者に対して『０歳からの保育に関する意識調査』を実施した。調査の結果からは、保育所の保育者は総じて０歳からの保育効果を肯定的に受け止めている。また０歳児の段階においては、育児休業を充実させて家庭養育を重視させるのが適当とする意見と、０歳児保育を保育所で進めるのが適当とする意見とに二分された。保育者のファクター別にみると、保育者自身の乳幼児期の被保育体験の有無による相違は全くみられなかったが、しかし０歳児保育担当経験の有無、その経験年数の長さ、また保育者の年齢による意識や意見の相違がみられた。特に、０歳児保育担当経験の有無による相違は最も顕著であり、経験ある保育者は職業上のプラスの吸引効果も含め、０歳からの保育効果、０歳児保育の必要性等に関して、より肯定的意識を持っていた。この傾向は、保育経験の長い保育者において、より明瞭であり、また高齢の保育者程概ねその傾向がみられることは注目された。一方、これらの０歳児保育を有効に進めるためには、家庭養育や親の役割特に保育所と家庭の連携が重要であることが指摘された。子どもの発達に最も影響を及ぼす条件としての家庭養育と親子関係、保育所と親の協力等々の意義があらためて確認された。
見出し語：　乳児保育、０歳からの保育、保育効果、保育所、保育者

Study on the Effects of Day Nursing from the First Year of Age on Child Development

Takehiro AMINO, Takeko MOCHIZUKI, Tadaaki KATO, Noriko IKEDA, Akiko MARUO
Tamotsu KANEKO, yukie NODA, Tomi TSUKAHARA, Hiroshi SEKIGUCHI, Isao TOCHIO

The result of "Opinion Reseach on the Day Care on the First Year of Age" was analysed. Object of there search was day care personnel in Day Nursery.Generally day care personnel accepted positively the effect of early infant day care environment. Opinion in reference to the child care environment at the first year of age separated both to the promotion of the infant care leave system and to the promotion of the early infant day care system. Acceptive opinion toward the plus effect of day care environment on the first year of age and the positive opinion toward promotion of early infant day care were shown more in persons who had been experienced this early infant day care and whose ages were older. It was considered to be important,furthermore,that the cooperative activity of Day Nurseries with children's families and parents and their family supporting activity was much indispensable.
Key Words: Infant Day Care, Effect of Day Nursing, Day Nursery, Day Care Personnel

Ⅰ　目的

０歳からの保育がその後の発達に及ぼす影響については、これまで種々の関心と議論を呼びながら、必ずしも長期的、縦断的な検討が十分に加えられてきたとは言い難い。０歳からの保育の是非を問うだけではなく、そのプラス、マイナスの効果を総合的にとらえ、より望ましい保育のあり方を検討する必要がある。このため、横断的、縦断的にこの課題に関する研究をすすめ、今後の保育及び家庭養育のあり方について検討する。

Ⅱ　方法

本年度は、これまでの縦断的、横断的研究をふまえ、保育所の保育者自身が持っている０歳からの保育に関する意識及び保育効果に関して分析、検討するため『０歳からの保育に関する意識調査』を次のとおり実施した。

1　調査の対象

対象保育所数は、47都道府県及び11指定都市の保育所各 2か所（東京都のみ 4か所）の公・私立保育所（公立39か所;33.1%、私立79か所;66.9%）計 118園である。調査対象保育者数は、０歳児保育を担当している保育者又は経験したことのある保育者、及び経験したことのない保育者を合わせ各園10名、計1180名である。しかし保育所によっては、保育者数が10名に満たないところがあり、その場合は、保育者全員に回答を依頼した。

2　調査の内容と方法

調査内容は、保育者の年齢、０歳児保育担当経験、保育者自身の子どもの頃の状況（きょうだい、両親の就労状況、被保育体験）の基礎項目及び以下の調査項目である。

(1) 保育所園児にとっての０歳からの保育環境の効果
(2) ０～１歳時点の保育所園児の傾向
(3) ０歳からの保育と年中乃至年長幼児期からの保育効果の相違
(4) 保育者にとっての０歳からの保育に関する意見
(5) 保護者にとっての０歳からの保育に関する意見

調査は、郵送法により、1990年11月から12月の間実施した。

3　回答保育所数及び保育者数

回答のあった保育所数は74園であり、回答率は62.7%であった。保育者数は 672名である。そのうち、66園(89.2%) が私立であり、公立は 8園 (10.8%)ときわめて少ない。従って、以下に分析する結果は、私立保育所を主にした結果であるといえる。

Ⅲ　結果

1　０歳児保育の実施状況

74保育所中、０歳児保育を実施している園は61か所、82.4%にのぼっている。保育開始月齢では、生後 2か月未満が33か所、44.6%に及び、 6か月未満迄で３分の２を占めている。

2　保育者の状況

672名の保育者の年齢別、０歳児保育担当経験の有無別及び０歳児保育経験年数別、並びに乳幼児期に１年以上保育を受けた体験の有無別にみたものが、表 1～3 である。保育者の年齢別では、20歳代が約 6割近くを占めている。 6割以上の保育者が０歳児保育担当経験がありそのうちの４分の３は、経験年数が 5年未満である。また保育者自身保育を受けた体験のある者は、約半数に近く、そのうちの約半数が保育所保育を経験している。

これらの保育者の年齢、０歳児保育担当経験、経験年数及び保育者自身の幼時被保育体験の４つのファクターを、以下の分析に用いたが、保育者自身の幼時被保育体験の有無による相違は、全くみられなかった。

表 1　年齢別保育者数

	人（%）		
20～25歳	233(34.7)		
26～30	158(23.5)	41歳以上の内訳	
31～40	145(21.6)	41～50歳	84(12.6)
41～	118(17.6) ⇒	51～60	29(4.3)
不　明	18(2.7)	61～	5(0.7)
合　計	672(100.0)		

表 2　０歳児保育担当経験の有無及び経験年数

	人　(%)		経験年数の内訳	
有　り	416 (61.9)	⇒	２年未満	156(23.2)
無　し	245 (36.5)		５年未満	157(23.4)
不　明	11 (1.6)		５年以上	72(10.7)
合　計	672 (100.0)		不　明	31(4.6)

表 3　乳幼児期に1年以上保育を受けた経験の有無

	人	(%)
有り	328	(48.8)
祖母等親戚・身内の人	143	(21.3)
近所の人	13	(1.9)
保育所	174	(25.9)
その他の保育施設	44	(6.5)
その他	23	(3.4)
無し	335	(49.9)
不明	9	(1.3)
合計	672	(100.0)

3　0歳児にとっての保育環境の効果

保育所に0歳から入所した児童にとっての、0歳の時点での保育環境の効果について、全体の傾向及び保育者自身の被保育体験別、0歳児保育担当経験の有無と経験年数別、保育者の年齢別にみたものが、表 4である。

各項目の最も高い割合のものをみると、よい効果があるとするものが4項目、どちらとも言えないとするもの3項目であり、よくないとする項目の方がよいとする項目より高いものは、わずか2項目であった。従って、全体的には0歳からの保育環境のプラス面の効果を否定している割合はきわめて低いと言えよう。しかし積極的な効果として受けとめている項目も限られている。ファクター別にみると、保育者自身の乳幼児期の保育体験の有無別による有意な差はみられないが、0歳児保育経験の有無別による差がみられた。またその中では、担当経験の年数による相違はみられず、直接0歳児保育にたずさわっている場合には、0歳児保育の経験をもつことによって、保育環境のプラスの効果を認めている結果が示されている。

これを、保育効果が積極的に受けとめられた順、即ち、よいとする割合の高い順にみていくと、より理解しやすい。最も多く有意な差がみられた0歳児保育担当経験の有無別に図示してみると、図1のとおりである。屋内・屋外で伸び伸びと過ごすこと、遊具等発達上よい物が揃っていること等、保育所の物理的、自然的環境が高位を占め、また多くの子どもたちと一緒に過ごすことのできる保育所の特徴が、0歳からもプラスとなっていると受けとめられている。更に離乳を進めやすい、アレルギー食の管理がしやすいことなど保健・栄養面の環境効果が続く。しかし特徴的なことは、複数の保育者に育てられること、日中専門の保育者に育てられることなど、保育者という最も重要な人的環境の面ではその評価がきわめて低くなる。複数の保育者に関しては、よいとする割合とよくないとする割合がほぼ均衡し、日中保育者に育てられることに関しては、よいとする割合は10%にも達せず、よくないとする割合は20%を越えている。そして、どちらとも言えないとする割合が非常に高い。保育者の意識の中で、日中子どもが親とくに母親から分離された環境の影響を、保育専門家の人的環境の影響より重視している結果である。しかし図1にみるように、0歳児保育を経験している保育者は、経験のない保育者よりも、よいとする割合がきわめて高く、母親と分離することが子どもに及ぼす影響に関する一般的意識とともに、経験を通じて体得した、保育者による0歳児保育の効果をも明確に受けとめている結果が示されている。

4　0～1歳時点の0歳時入所児童の傾向

保育所に0歳から入所した児童の、0～1歳時点の傾向について、全体の結果及び保育者自身の被保育体験別、0歳児保育担当経験の有無と経験年数別、保育者の年齢別にみたものが、表 5である。先の0歳児にとっての保育環境の効果は、比較的保育者の意識面が示されているのに対し、この内容は具体的な状況、傾向をみるものである。このことを念頭に入れ、ファクター別にみると保育者自身の乳幼児期の保育体験の有無による有意な差はここでもみられないが、0歳児保育担当経験の有無とその経験年数及び保育者の年齢別による有意な差は多くの項目でみられた。0歳児保育担当の経験によって、しかもその経験の度合いによって相違が大きくなるという結果が示されている。

調査上、項目は肯定的・否定的表現を混在させているので、回答のはい、いいえを望ましい発達にある側で捉え直してみていくと、より傾向を把握しやすい。その順位を、2番目に多く有意な差がみられた保育者の年齢別を例に図示したものが、図2である。表5及び図2からその傾向をまとめると、おおむね対人関係、精神発達、運動、健康面の全般にわたって、0歳児保育担当経験のある保育者は、経験のない保育者よりも望ましい発達にあると受けとめる傾向が強く、また経験の有無による相違がみられない他の項目で担当経験の年数が多い保育者は少ない保育者よりも望ましい発達にあると受けとめる傾向がある。更に、情緒、心身発達、運動、健康面にわたって、高齢の保育者は低齢乃至低中齢の保育者よりも望ましい発達にあると受けとめている。保育環境の中での対人関係面にかかわる項目が高位を占め、次いで運動

表 4　保育者自身の被保育体験別、0歳児保育担当経験の有無別・経験年数別、保育者の年齢別、0歳児にとっての保育環境の効果

	全体			「よい」とする割合の有意差検定			
	よい	どちらとも言えない	よくない	幼時被保育体験の有無	0歳児保育の担当経験の有無別	0歳児保育の担当経験の年数別	保育者の年齢別
日中親よりも専門の保育者に育てられる	50(7.5)	457(68.3)	162(24.2)		** 有り＞無し		
複数の保育者に育てられる	135(20.3)	396(59.5)	135(20.3)		** 有り＞無し		
多くの子どもたちと一緒に過ごす	465(69.9)	170(25.6)	30(4.5)				
屋内、屋外で伸び伸びと過ごす	645(96.1)	24(3.6)	2(0.3)		* 有り＞無し		
遊具等発達上よい物が揃っている	535(80.5)	127(19.1)	3(0.5)				
離乳をすすめやすい	393(59.0)	264(39.6)	9(1.4)		* 有り＞無し		
アレルギー食の管理がしやすい	274(41.6)	337(51.2)	47(7.1)				* 低齢＜高齢

表 5　保育者自身の被保育体験別、0歳児保育担当経験の有無別・経験年数別、保育者の年齢別、0～1歳時点の園児の傾向

	全体			積極的に評価する割合の有意差検定			
	はい	どちらとも言えない	いいえ	幼時被保育体験の有無	0歳児保育の担当経験の有無別	0歳児保育の担当経験の年数別	保育者の年齢別
親との絆が育ちにくい	99(14.8)	322(48.2)	247(37.0)		*** 有り＞無し		
保母等保育者ができるだけ傍にいることを求める	376(57.1)	251(38.1)	31(4.7)		* 有り＞無し		* 低齢＜高齢
機嫌がよく情緒が安定している	118(17.8)	477(72.1)	67(10.1)			* 少ない＜多い	** 低齢＜高齢
感情表現が乏しい	16(2.4)	274(41.1)	376(56.5)				
周囲の物や人への関心や反応が薄い	21(3.1)	175(26.2)	472(70.7)		** 有り＞無し	** 少ない＜多い	
喃語や言葉による反応が多い	400(60.2)	238(35.8)	27(4.1)		* 有り＞無し		* 低中齢＜高齢
誰とでも馴染みやすい	347(52.0)	304(45.6)	16(2.4)			** 少ない＜多い	** 低齢＜高齢
運動面の発達が早い	355(53.0)	310(46.3)	5(0.7)		* 有り＞無し		*** 低齢＜高齢
動作が活発である	319(47.7)	342(51.1)	8(1.2)			* 少ない＜多い	** 低齢＜高齢
疲労しやすい	160(24.0)	358(53.8)	148(22.2)		* 有り＞無し		
食欲が旺盛である	286(42.6)	372(55.4)	13(1.9)		*** 有り＞無し		* 中齢＞低高齢
病気にかかりやすい	232(34.6)	356(53.1)	83(12.4)		* 有り＞無し		** 低齢＞中高齢

表 6　保育者自身の被保育体験別、0歳児保育担当経験の有無別・経験年数別、保育者の年齢別、年中乃至年長の幼児期（4、5歳）からの保育効果の相違

	全体			積極的に評価する割合の有意差検定			
	はい	どちらとも言えない	いいえ	幼時被保育体験の有無	0歳児保育の担当経験の有無別	0歳児保育の担当経験の年数別	保育者の年齢別
親子関係や親子の絆が育ちにくい	41(6.2)	258(38.9)	365(55.0)		*** 有り＞無し		
自分のことは自分でする等自立心が育つ	440(66.0)	205(30.7)	22(3.3)				
全般的に基本的生活習慣の確立がおくれる	17(2.6)	135(20.3)	514(77.2)				
気分が安定しており、大体機嫌がよい	110(16.6)	477(71.9)	76(11.5)		*** 有り＞無し	** 少ない＜多い	*** 低齢＜高齢
感情の表現が乏しい	16(2.4)	228(34.4)	419(63.2)				** 低齢＜高齢
活発で意欲的である	274(41.3)	353(53.2)	37(5.6)		** 有り＞無し	*** 少ない＜多い	
友達と親しく付き合うことが少ない	12(1.8)	120(18.0)	533(80.2)		* 有り＞無し		
仲間意識が強く、他人を思いやる	342(51.4)	295(44.3)	29(4.4)				
わがままが多く、我慢強さに欠ける	18(2.7)	286(43.0)	361(54.3)		* 有り＞無し		
決まり、約束事、ルールを守る	356(53.5)	279(41.9)	31(4.7)			* 少ない＜多い	
言葉、知識等、精神面の発達が早い	297(44.5)	338(50.6)	33(4.9)		* 有り＞無し	* 少ない＜多い	** 低中齢＜高齢
運動面の発達が早い	293(43.9)	347(51.9)	28(4.2)		* 有り＞無し		*** 低中齢＜高齢
偏食が少ない	440(65.9)	192(28.7)	36(5.4)				*** 低齢＜高齢
虫歯が多い	15(2.3)	376(56.5)	275(41.3)				** 低齢＜中高齢
風邪をひきやすい	36(5.4)	332(49.8)	298(44.7)			** 少ない＜多い	
病気にかかりやすい	52(7.8)	336(50.3)	280(41.9)		* 有り＜無し	** 少ない＜多い	

χ^2 検定：　*** P＜0.001　** P＜0.01　*P＜0.05

・活動面が続いている。高齢保育者ではとくに運動・活動面の評価が高い。一方、親との絆の形成、情緒安定性の面や健康・食生活の面での評価の低さが、０歳児保育のもう一つの特徴として示されている。

5　０歳からの保育と年中乃至年長の幼児期（４、５歳～）からの保育との効果の相違

保育所に０歳から入所した児童と、年中乃至年長の幼児期（４、５歳～）から入所した児童との保育効果の相違について、全体の傾向及び保育者自身の被保育体験別、０歳児保育担当経験の有無と経験年数別、保育者の年齢別にみたものが、表 6である。

ファクター別にみると、表 4及び 5と全く同じく保育者自身の乳幼児期の保育体験の有無による有意な差はここでもみられなかった。そして表 5と同じく０歳児保育担当経験の有無とその経験年数及び保育者の年齢別による有意な差は多くの項目でみられた。

この場合も、調査上の項目は肯定的・否定的表現を混在させているので、回答のはい、いいえを望ましい発達にある側で捉え直し、０歳からの入所の方が、年中乃至年長幼児期からの入所よりも望ましい発達状態にあると受けとめられた順にみていくと、望ましい割合が50%以上に達している項目は、図３のとおりであり、50%未満の項目は、図 4のとおりである。

友達との付き合いを筆頭に、対人関係、社会性、そして生活習慣、自立性において、０歳からの保育効果の方が高い。また、親子関係や親子の絆の形成についても、育ちにくいとする考え方に対して全体の半数以上の保育者が否定しており、０歳児保育担当経験者のその割合は非経験者よりも非常に高い（経験あり：61.2%、経験なし；44.8%）。

望ましい発達にあるとする割合が50%未満の項目をみると、６項目が40%台であり、精神・運動面の発達、健康面では、年中・年長幼児期からの入所児童との保育効果の差はみられない、あるいは０歳からの方が望ましくないとする考え方が増えている。気分の安定性や機嫌よさに関しては、最も割合が低く、どちらとも言えないとする割合が70%を越えている。

6　０歳から保育を受けている児童の気になる特徴

０歳からの保育を受けている児童の特徴のうち、特に気になること、困っていることについて、０歳児保育担当経験者の自由記述による回答を項目と件数のみに集約したものが、表 7である。記入者は 122名（29%）で、他に０歳児保育担当経験の無い 6名の回答が含まれている。気になる特徴の具体的内容は、児童側の問題と親側の問題に大きく二分される。

児童側の問題としては、病気、食事・食行動、生活リズムなどの生活・養護面や、対人行動、情緒的な側面の問題が多いが、休み明けにおむつかぶれ、体調を崩す、親とのふれあい不足など、問題の背景に乳児の生活に対する親の意識や配慮の不足を示すものが含まれている。一方、家庭生活と親の問題、親の姿勢と保育への問題にみられるように、親としての姿勢、態度を問題にするものが多く、中にはかなり強い言葉で親のあり方を批判するものもあり、０歳児保育で起こる児童の問題は親の養育の姿勢が強く影響しているという考えをよみとることができる。

7　保育者にとっての０歳からの保育

(1)　０歳児保育をすすめる上で重要なこと

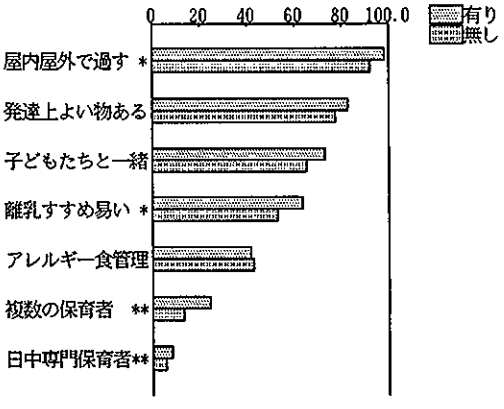
０歳児保育をすすめる上で、保育者として特に重要であると考える事柄を、12項目中 3項目選択により回答を求めた結果を、回答件数の多い順に表 8に示した。

「家庭との連携、協力」が最も多く、次いで「スキンシップ」、「安全、危険防止の配慮」を過半数が選択している。ファクター別にみたとき、重要であると考える事柄の順位は、０歳児保育担当経験の有無別では差がみられないが、経験の長いもの、保育者の年齢別で中・高齢保育者では、２位と３位が全体の順と逆になり、５位に「園全体の一貫した保育方針」が上がってきている。また、「スキンシップ」を重要と考える割合は高齢者程減少し（年齢の低い方から、79%、69%、52%、48%）、「人間的なふれあい」は低年齢保育者の 4%に対し、高齢保育者では20%と多くなり、園内における保育者の役割の変化や認識の変化を反映するものか、０歳児保育経験年数や加齢による相違がみられた。

(2)　０歳児保育を保育所ですすめること

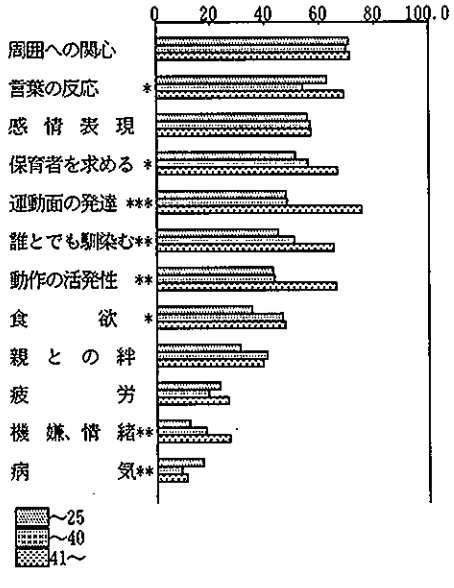
０歳児保育を保育所ですすめることについてどう考えるかを、 5項目の中から自分の考えに最も近いもの一つの選択を求めた。その結果は、図表 1に示したように、「育児休業制を充実させて０歳の時期は家庭養育を重視するのがよい」が最も多いが、「保育所での保育に限界はあるが、０歳児保育の高いニーズからみて保育所ですすめることが適当」と「今日の保育所の役割からみて当然積極的にすすめるべきである」とを合わせると、47.9%になり、大勢は育児休業の充実と０歳児保育を保育所ですすめることを肯定するものとに二分されている。ファクター別にみると、０歳児保育担当経験の有無別では、意見の相違が明瞭であり（$P<0.001$）、図表 1にみると

おり、経験者は未経験者に比べ０歳児保育の推進を肯定する割合が優位に高くなっている。保育者自身の被保育体験、０歳児保育担当の経験年数、保育者の年齢別では差がみられなかった。但し「育児休業の充実ーー」に関しては、経験の長い保育者（33%）より短い保育者（46%）の方が割合が高く、また高齢の保育者（39%）より低年齢の保育者（52%）の方が高く、低年齢者程この項目への支持が高い傾向がみられた。



χ^2 検定： ** P＜0.01　* P＜0.05

図１　０歳児保育担当経験の有無別０歳時点の保育環境の効果（『よい』とする割合）



χ^2 検定；*** P＜0.001　** P＜0.01　* P＜0.05

図２　保育者の年齢別０～１歳時点における０歳時入所児童の傾向（望ましい発達にある割合）

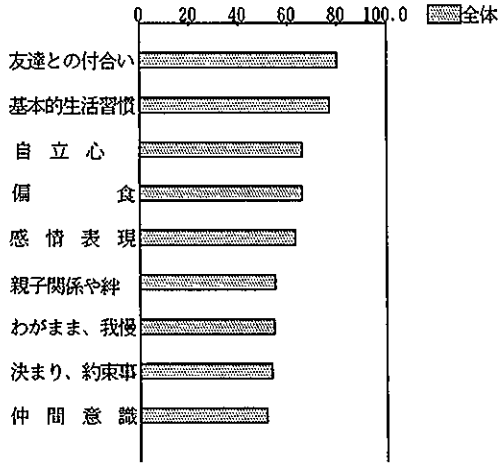


図３　０歳からの保育と年中乃至年長幼児期からの保育との効果の比較；０歳からの方が望ましい発達にあるとする割合が50%以上の項目

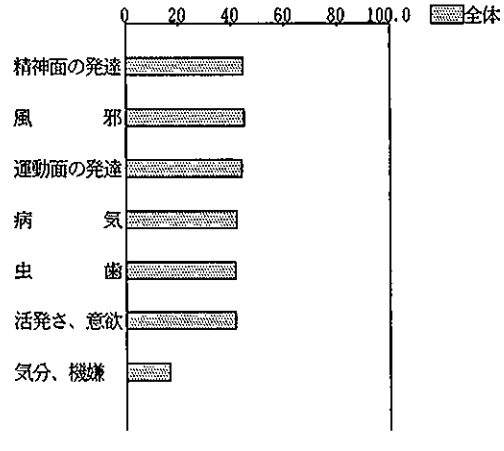


図４　０歳からの保育と年中乃至年長幼児期からの保育との効果の比較；０歳からの方が望ましい発達にあるとする割合が50%未満の項目

表 7　0歳から保育を受けている児童の気になる特徴（自由記述）

	生活・養護の問題	発達・情緒の問題	親と保育への問題	計
項目及び件数	病気:42 食事・食行動:27 生活リズム・生活習慣:18 小計　87	対人行動：31 情緒：25 習癖：16 集団生活：11 発達：4 小計　87	家庭生活と親の問題：42 親の姿勢と保育への問題:10 設備、制度に関連して：5 その他：5 小計　62	236

表 8　0歳児保育をすすめる上でとくに重要なこと

	件数	割合 (%)
家庭との連携、協力	600	89.6
スキンシップ	434	64.8
安全、危険防止の配慮	374	55.8
人間的なふれあい	190	28.4
生活のリズム	113	16.9
授乳と離乳	78	11.6
園全体の一貫した方針	70	10.4
親教育	39	5.8
健康増進（うす着、外気浴）	38	5.7
感染防止	32	4.8
乳児、幼児とのふれあい	21	3.1
しつけ	15	2.2

表 9
0歳児保育を強化する場合、通常保育に加えとくに大切なこと

	件数	割合 (%)
育児相談・講座	391	63.6
病児保育	78	12.7
延長保育	67	10.9
一時保育	59	9.6
その他	20	3.3

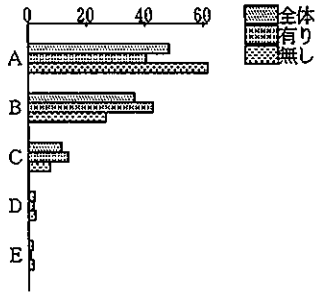
表11　発達に影響を及ぼす最も重要な条件

	件数	割合 (%)
家庭での親子のふれあいや養育態度	436	66.2
保育所と親との協力	207	31.4
保育者をはじめとする保育所の保育条件	12	1.8
その他	4	0.6

表10　0歳児保育をすすめる上で保育体制上困ること（自由記述）

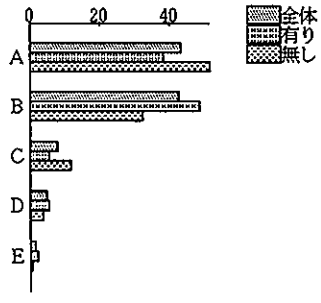
	職員配置・保母の条件等	保育施設としての体制	親への対応	計
項目及び件数	職員配置：61 保母の条件：10 乳児保育への意見：9 複数担任制：4 小計　84	保育施設としての体制：30 保育方法、内容の問題：11 医療面：9 特例、延長保育：6 入所の問題：6 小計　62	親への対応：15 親への要望：10 親の就労について：4 その他：8 小計　37	183

	全体の件数	割合 (%)
育児休業制度を充実させ家庭養育を重視　A	318	48.4
高いニーズからみてすすめることが適当　B	240	36.5
保育所の役割からみて積極的にすすめるべき　C	75	11.4
家庭的、個人的保育ができる環境充実　D	15	2.3
0歳児保育をすすめる必要はない　E	9	1.4



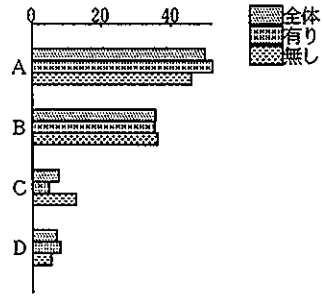
図表 1　全体及び0歳児保育担当経験の有無別0歳児保育を保育所ですすめることについての意見

	全体の件数	割合 (%)
家庭で親の手で育て、育児休業制度を広げる　A	284	43.2
やむを得ない場合のみ0歳から保育所で保育　B	280	42.6
育児期間は仕事を止め育児に専念する　C	51	7.8
社会が子育てを援助するため0歳から保育所　D	32	4.9
女性の社会進出のため0歳から保育所で保育　E	11	1.7



図表 2　全体及び0歳児保育担当経験の有無別親が0歳児を預けて働くことについての意見

	全体の件数	割合 (%)
父母が協力して育児にあたれば悪影響はない　A	328	49.8
悪影響を及ぼすかどうかは一概に言えない　B	233	35.4
子どもの心理的発達に望ましくない　C	51	7.7
保育所の0歳児保育は子どもの発達に好影響　D	47	7.1



図表 3　全体及び0歳児保育担当経験の有無別長時間親と離れていることについての意見

(3) 0歳児保育を強化する場合、通常保育に加えてとくに重要なこと

0歳児保育を保育所として強化していく場合、通常保育に加えてとくに重要であると考えられる事柄について5項目の中から1項目の選択を求めた。その結果は表.9に示すように、「育児相談・講座」が64%を占め、最も多い。しかし、ファクター別にみた相違はなかった。

(4) 0歳児保育をすすめる上で保育体制上困ること

0歳児保育を保育者としてすすめる上で、保育体制上特に気になること、困っていることについて、自由記述による回答を項目と件数のみに集約してまとめたものが表10である。記入者は120名(29%)である。内容としては、職員配置や保母定数に関するものが最も多く、保母の増員を求める声が目立った。この中には、定数配置がされてはいるが、乳児の個々の要求に対応することが困難であるので、定数自体の見直しを求めるものと、実際に定数配置されているかどうかは不明であるが、増員を求めているものも多かった。

次いで多いのが、保育施設の整備、充実に関するもので、月齢による発達差や個人差が大きい乳児の生活を守るために、保育室と寝室とを分離して整備する、調乳室や調理室などの完備を求める等々であった。このほか、保育方法や医療管理の充実、入所に関する制度上の問題、保母の労働条件等多様であるが、ここでも親への対応や親への要望が出されている。

8 親にとっての0歳児保育

(1) 親が0歳児を預けて働くことについて

親が0歳児を預けて働くことに関する保育者の意見を示したものが、図表2である。大勢は、「乳児期は家庭で親の手で育て、その間育児休業制を拡げるのがよい」と「親がその職業を続けなければならない等やむを得ない場合のみ0歳から子どもを保育所等に預けるのがよい」に二分された。

ファクター別にみると、0歳児保育担当経験の有無別では、未経験者の方に育児休業制を拡げるのがよいとする割合が高く、有意な差が認められた($P<0.001$)。また、0歳児保育担当の経験年数の少ない保育者から多い保育者の順に、42%、38%、28%と割合が低くなっており、先の図表1に示した結果と符合している。

(2) 長時間親と離れていることの影響

親が長時間0歳児を預けて働くことの影響について保育者がどう考えているかを示したものが、図表3である。「望ましくないが、父母が協力し責任を分かち合って育児に当たれば悪影響は及ぼさない」とする意見が約半数を占めて最も多く、「悪影響を及ぼすかどうかは一概に言えない」とする意見が3分の1であった。

ファクター別にみると、0歳児保育担当経験の有無別では有意な差が認められ($P<0.01$)、「それ自体が子どもの心理的発達に望ましくない」という意見が未経験者の方に多かった。

発達に最も重要な影響を及ぼす条件をみたものが、表11である。「家庭での親子のふれあいや養育態度」をあげた保育者が66%と非常に多く、次いで「保育所と親の協力」が31%であり、0歳児保育が子どもに及ぼす影響については、親の養育態度や意識が重要な条件であると考えられている。ファクター別には差がみられなかった。

(3) 親にとっての利点

0歳児保育は親にとってどのような利点があるかについて、9項目の中から自分の考えに近い3項目を選択する方法により回答を求めた結果が、表12である。「育児を理由に仕事をやめる必要がなく、安心して働き続けられる」とする意見が最も多く、2位に「家庭で子どもと一緒のときは子どもとの密度の濃いふれあいに気をつける」、3位に「保育所の生活を通じて親が育児を学ぶことができる」と続き、いずれも半数以上を占めている。

同様の設問で、自分自身が子どもを保育所に預けた経験を持つ保育者に対し、最も自分の考えに近いものを1項目選択してもらった。表12の右欄にみるように、1位と2位とが逆になり、保育者としての意識が反映してか、一般の親として考えた場合とは違いがみられた。

(4) 親にとっての問題点

前項の親にとっての利点に対し、0歳児保育がもたらす親にとっての問題点について、同じように回答を求めた結果が、表13である。「親の生活に合わせ、子どもの生活を乱しがち」を指摘した保育者が最も多く、2位に「子どものことが保育所任せになる」、3位に「子どもより仕事優先になる」と続いている。自分自身が保育所に子どもを預けた経験を持つ保育者では、「子どもより仕事優先」、「親の生活に合わせーー」が他の項目よりも比較的高い割合を占めた。

親にとっての問題点をファクター別にみると、保育者の年齢別で有意な差が認められ($P<0.001$)、1位、2位の順位は変わらないが、3位、4位が低年齢保育者と中・高齢保育者の間に相違がみられた。

(5) 親や社会の現状と今後の動向

子どもを保育所に預けている親と接した経験を通じて保育者が親や社会の現状と今後の動向についてどう考えているかを示したものが、表14である。「保育所を信頼して子どもを預けている」については、96%が肯定して

表12　全体及び保育所に子どもを預けた経験のある保育者別にみた０歳児保育：　親にとっての利点

	全　体	割合 (%)	預けた経験ある保育者	割合 (%)
安心して働き続けられる	472	71.6	53	31.4
社会参加して自分の力を活かせる	181	27.5	13	7.7
専門家による保育なので安心	261	39.6	12	7.1
保育所生活を通じて親が育児を学ぶ	354	53.7	18	10.7
父母が協力して育児にあたる	203	30.8	13	7.7
父母と子供のふれあいが多くなる	11	1.7	0	0.0
夫に妻の立場への理解が深まる	14	2.1	1	0.6
子どもべったりにならない	58	8.8	1	0.6
家庭で子どもと密度の濃いふれあいに気をつける	362	54.9	58	34.3

表13　全体及び保育所に子どもを預けた経験のある保育者別にみた０歳児保育：　親にとっての問題点

	全　体	割合 (%)	預けた経験ある保育者	割合 (%)
子どもより仕事優先	320	35.4	53	29.6
接触時間が不足し親子関係希薄	164	25.3	17	9.5
子どもの生活を乱しがち	432	66.6	49	27.4
子どもに悪影響がないかと不安	65	10.0	9	5.0
親としての意識が育ちにくい	56	8.6	1	0.6
育児を通して育ちあう経験が不足	167	25.7	11	6.1
保育所任せになる	341	52.5	14	7.8
子どもの成長、変化に気づきにくい	63	9.7	0	0.0
家庭で過保護になる	174	26.8	15	8.4
母乳を与えにくい	142	21.9	10	5.6

表14　親や社会の現状、今後の動向に関する意見（「はい」、「いいえ」別）

	「はい」	割合 (%)	「いいえ」	割合 (%)
親は保育所を信頼して子どもを預けている	625	95.9	318	4.1
親は自分たちも積極的に育児に努めている	422	67.2	240	32.8
父親も積極的に育児にかかわっている	385	60.1	75	39.9
親は子育ての助言や援助を求めている	569	87.5	15	12.5
短時間、短期間の一時的保育を求めている	529	83.3	9	16.7
保育ママ、ベビーシッターの需要は増加するだろう	501	79.3	9	20.7
０歳児保育のニーズはますます広がるだろう	628	96.9	9	3.1
女性は社会進出し、働く母親は増えるだろう	637	97.8	9	2.2
育児休業制度が普及すると利用者は増加するだろう	598	91.6	9	8.4

いる。また、「子育て上の支援」、「保育所の一時保育」、「０歳児保育」のニーズを肯定する割合は非常に高く、今後これらの保育所の対応は一層高まるだろうと受け止めている。更に、「女性の社会進出」、「育児休業制度の普及」は一層増加するだろうという意見に肯定する割合は、90％以上に達している。一方、家庭の育児、親の養育については、他の項目と比較してその割合は低いが、「親も積極的に育児に努めている」、「父親も積極的にかかわっている」と肯定的な見方をしている保育者は、過半数であった。

ファクター別には、有意な差は認められなかった。

Ⅳ　考察

1　０歳児保育に関する保育者の見解

０歳児保育を担う保育所や保育の当事者自身が、広がる０歳児保育に関してどのような意識、意見、見解を持っているかを知ることは、乳児保育環境を検討する上で欠かすことができない。ここに示した研究の結果は、概ね予想したように、保育者は総じて０歳からの保育効果を肯定的に受け止めていることが示されている。０歳時点及び１歳時点における傾向、更に年中・年長からの保育と比較しても、概ね過半数の項目において保育環境の効果や望ましい発達がみられるとしている。

０歳からの保育の効果は、とくに家庭環境では必ずしも得られない物理的、自然的環境や多くの子どもたちとともに過ごせる環境、保健・栄養面の環境を評価する割合は非常に高い。０歳の時期から卒園するまでの保育環境は、親子関係を含む対人関係、社会性に関しても概ね望ましい発達状況にあると受け止めている保育者が多いが、一方０歳児の保育に関しては、育児休業の普及等家庭養育重視と、０歳児保育の推進との意見に二分されていることにも注目する必要がある。

2　０歳児保育経験と０歳児保育の受け止め方

これを専門家や一般の人々の見解と比較するとき、直接関わっている保育者が示す見解は、より説得力を持ったものとも言えるが、しかし一方、直接関わっている故にプラスへの吸引効果が働き、客観性を弱めるという危険性を併せ持っている。従って、保育者の各ファクター別に分析した時に、有意な差がみられるものは、この面でより妥当な解釈がしやすく、今後のあり方を考える上で有効なものと言えよう。保育者のファクターのうち、最も多く相違がみられたものは、０歳児保育担当経験の有無による相違である。総じて、経験のある保育者の０歳児保育に対する評価は、未経験の保育者より肯定的で高い。先ず意識面でみると０歳の時期から日中親とりわけ母親から分離されることのマイナスの影響は、一般の人々は言うまでもなく、保育者の意識においても重視されていると言えよう。保育専門家による保育環境の効果を凌駕する程に、その意識は強い。しかし０歳児保育経験者は、未経験者よりも有意に高く保育者による保育効果を認めている。更に具体的な状況、傾向の受け止め方で比較すると、その傾向は一層顕著である。親子関係や親子の絆の形成の難しさや日中の親との分離が及ぼすマイナスの影響等に対して否定する割合、０歳児保育の推進を肯定する割合は経験者に高いというように、非常に明瞭に表われている。

また、保育者のファクターの中で二番目に多く有意な差のみられた０歳児保育の経験年数でみると、０歳児保育の経験年数が多い保育者は、望ましい発達にあると受け止める割合や、育児休業よりも０歳児保育の推進を肯定する割合が有意に高い。第三のファクターである保育者の年齢による相違をみても、高齢の保育者程望ましい発達にあるとする受け止め方が強く、むしろ年齢の低い保育者の方が、スキンシップの重要性や、育児休業の充実に高い反応を示している。低・中年齢保育者の方が自ら親となる現実的な生活感を反映している面も考慮すべきであるが、これら三つのファクターから分析した結果を総合的にとらえていくと、経験の有無のみならず、経験の積み重ね、そして加齢が、０歳からの保育のプラス効果の受け止め方を促進していることは、単なる職業アイデンティティによる吸引効果以上の考慮すべき内容を含んでいると言えよう。

3　保育所の役割と家庭とのかかわり

以上のことから、０歳からの保育に対する保育者の見解は、その経験が深い程肯定的であることが明らかにされた。しかしながら、今回の研究からはもう一つの重要な点が示唆された。それは、０歳児保育が家庭養育や親の役割と無関係に、その有効性や肯定的評価がなされているとは言えないということである。０歳児保育を受けている児童の気になる特徴の中に示されている家庭生活や親の養育との関連性、０歳児保育を強化する際の「育児相談、講座」の重視、日中の親との分離の悪影響を排するための両親の養育の分担、子どもの発達に最も影響を及ぼす条件としての家庭養育と親子関係や保育所と親の協力の重視等々、この点での０歳児保育と家庭との連携の意義を、あらためて強調したい。今後の地域における保育所の役割という点からも、重要な視点である。